【 共通テストリーディング問題解法の手順 】

⑴ 問題文冒頭の導入部をまず読んで、設定を確認する。
記事冒頭にそのタイトルが示されている場合には、それも読んで、記事の内容を（できる限り）予測する。

⑵ 設問の指示文を読んで、キーワードに下線を引く。

下線を引いたキーワードが本文[問題文]中に現れ出したら、そこが設問の対応箇所である可能性が高い。キーワードとは、主要品詞、つまり「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」など。中でも「名詞」は最大のキーワード。

選択肢の方は、基本的にこの時点では読まない。読むとすれば以下の場合。

①指示文の方に目ぼしいヒントがない。
②選択肢が短い。または内容が簡単。

そのような場合、選択肢のキーワードもチェックする。
内容が複雑な場合、余白にメモ書きをする。 ☜ただしこれは万一。

⑶ ヴィジュアル部分（イラスト・グラフ・図表・ポスターなど）がある場合には、本文を読む前にそれをチェックしておく。
特にグラフ・図表をチェックする際のポイントは以下の通り。

①タイトル　　☜グラフ・図表が作成されるに至った調査・研究の目的を間接的に知ることができる。
②横軸・縦軸（目盛りの）単位
③わかる範囲で、内容もチェック

ポスターなどは、それをチェックすることにより、本文の内容・展開を大まかに予想することができる。

⑷ 本文を読んでいく際の心得。

① 基本は「読みながら解きながら」。
本文を読んでいく中で、設問の対応箇所が見つかった時点で（その場で）解く。つまり「読む」作業と、「解く」作業を同時進行で行っていく。
② 「分割方式」で。
本文を複数分割し、その分割した箇所まで読んだところで、（一旦読みを止め、解ける設問、消せる選択肢がないかチェックをする。
③ 内容が複雑な場合、ポイントになりそうなところは、余白にメモる。

④特に評論文系の大問では、ストーリー[論旨]の展開と、設問の順序は一致している（つまり本文を読んでいけば、問１から順に対応箇所が現れる）ことが多い。

⑸正解を見極める際の心得。

①本文の対応箇所と正解の選択肢とは、必ず「同一内容異表現」。
②正解に悩んだら、消去法で(正解を)あぶり出す。
③「最も」「唯一の」「必ず」「絶対」「決して～ない」などの語（要するに、程度があまりに著しい語）が使われている選択肢は、×であることが多い。これを「極論不一致の原則」と言う。

(ex) absolutely「絶対に」 all/every「すべての～」 invariably「いつも」
only「唯一の～」 few/little「ほとんど～ない」 without exception「例外なく」
never「決して～ない」 without fail「間違いなく」 (almost) always「(ほとんど)いつも」
necessarily/certainly/definitely「必ず」 any「いかなる」

ただし、この原則は必ず当てはまるわけではないので、注意は必要。

⑹設問タイプ別の解法のアドバイスと注意点。

①チラシ・広告・告知文を用いた問題では、本文（チラシ・広告・告知）を読む際、まず見出しと欄外・注釈をチェックする。
その目的を問う設問の場合、本文前半にそれがあることが大半。

②「事実(fact)」と「意見(opinion)」を選ばせる設問における両者の区別の仕方。

「事実」	「意見」
・客観(情報)に基づく。	・主観(的判断)に基づく。
・話し手[聞き手]の好き嫌いや、善悪の(価値)判断に左右されない。	・話し手[聞き手]の好き嫌いや、善悪の(価値)判断に左右されうる。
※「事実」には普遍性がある。	※個人的感想・思い・気持ちも「意見」。

③本文中の語・句・節の表す意味を問う設問の場合、そのパラフレーズや(解答の)対応箇所は、下線部の直前もしくは直後にあることが大半。
「パラフレーズ」とは、下線部を別の表現で（わかりやすく）言い換えた語句・節のこと。

④エッセイ型の問題（第三問Ｂ）では、

1. 筆者[登場人物]の感情の変化・推移を問う設問の場合、これも本文中の対応箇所と正解は、「同一内容異表現」。
2. 最後に、そのストーリーから得られた教訓・学びなどを問う設問もあり得る。

⑤２種類の記事を比較して読む問題（第四問）で、「両者共に述べていないものを選べ」という設問では、「読みながら解きながら」（あるいは「分割方式」）で、消去法で正解をあぶりだしていく。
選択肢から複数の正解を選ぶ設問の場合も、消去法が使えることが多い。

⑥時系列に沿って出来事を並べる設問（第五問）では、

1. 選択肢中の出来事を表す語句（名詞や動詞など）
2. ポスター中の年(代)・時系列を示す数詞

をチェックし、それを目印に本文を読んでいく。

⑦本文の内容を要約した選択肢を選ばせる設問（第五問など）の場合、（各パラグラフの内容・展開を整理しながら読んでいくことも大切だが）最終パラグラフの冒頭文、または最終文の内容がヒントになることが多い。

⑧本文のタイトルを選ばせる設問（第六問など）の場合、選択肢は、先に全部 読んでおいた方がいい。
なぜなら、間違っている選択肢も、部分的に本文の内容を語ってくれている可能性が高いから。これは本文のテーマ予想に役立つ。
そして正解の選択肢は、一般的に抽象度が（不正解の選択肢と比べ）高いもの。
逆に具体性の高い選択肢は、不正解の可能性が高い。

⑺本文[問題文]を全部読み終えていなくても、正解を出し終えてしまったら、もうそれ以上問題文を読み続ける必要はない。次の問題へ向かう。

前後を「原因と結果」の関係で結ぶ動詞達

「～を引き起こす」型の動詞、(主語が「物・事」だった場合の)explain, acount for [～を説明する]や contribute to[～に寄与する], produce[～を生み出す], create[～を生み出す], mean[～を意味する]　provoke[～を挑発する], trigger[～のきっかけとなる], be responsible for(～の原因である) などは、「S＝原因」「O＝結果」という意味　関係になることが多い。
その場合、「Sが原因となって、結果としてOが生じる[できる]」などと訳してもいい。

※ただしmeanの場合は「S=O」の関係になることもある。

(ex) The red light means 'stop'. 赤信号は「止まれ」の意味だ

「～を引き起こす」型の動詞には bring about, cause, lead to, give rise to, induce result in, provoke, trigger (off), set off などがある。

①「～を引き起こす」型の動詞

S【原因】 ⟨ ② explain / account for / produce / create / mean / contribute to / be responsible for / ⋮ ⟩ O【結果】

【同一内容異表現の原則】

「内容一致[真偽]」問題の正解の選択肢の特徴は、正解なのだから内容的に本文と一致しているのは当然だが、表現の仕方が本文とは換えてある(別の表現で「言い換え」られている)。これを「同一内容異表現の原則」と言う。

この同一内容異表現の原則に関する大切なポイントをいくつかあげてみよう。

(1)表現の違いにまどわされずに、内容から正解を正確に見極められるか。

表現方法の変化には、具体的には以下のようなものがある。

①表現[語句]レベルでの言い換え

1.単語同士、熟語同士の「言い換え」 (同意語、反意語)

2.単語⇔熟語、句⇔節などの「言い換え」

②内容レベルでの言い換え

1.文法構造を転換しての言い換え (態の転換、仮定法⇔直説法、二重否定、原級比較・比較級⇔最上級など)

2.「抽象 ⇔ 具体」の言い換え

3.「因果関係(原因⇔結果)」での言い換え

(ex)「その国は大国の庇護の下に入った」=「その国の平和は保たれた」

4.逆の表現を否定する形での言い換え

別の言い方をすれば、ある事実[行動]・心情を別の[裏返した]事実[行動]・心情での「言い換え」

(ex)「よく欠席していた」=「あまり出席しなかった」

「男は嫌い」=「女が好き」

このようなある事を裏返したような表現で言い換えるパターンが(同一内容異表現では)最も多い。

5.事実・行動を心情での「言い換え」(又はその逆)、自然現象などを用いてのたとえ[比喩]

(ex)「彼の手紙を読もうともしなかった」 = 「彼が大嫌いだった」

特に評論文系では2.～4.(特に4.)、エッセイ・物語系では5.のパターンが多い。

以下の例文はすべて表現方法が異なっているが、内容的にはイコール。

・She explained it clearly. 彼女はそれをはっきりと説明した

=She accounted for it clearly.

・Not all the staff were present. 職員全員が出席していたわけではなかった
=Some staff were present. 出席していた職員もいた

・Neither of her parents is dead. 彼女の両親は、両方とも死んではいない
=Both of her parents are alive. 彼女の両親は、両方とも生きている

・The moment she saw me, she ran away. 彼女は、私を見るとすぐに逃げた
=No sooner had she seen me than she ran away.

・Nobody but a genius could do such a thing.
天才以外の誰もそんなことはできないだろう
=Only a genius could do such a thing. そんなことができるのは天才だけだ

・With a little more money, she would be sure to succeed.
=If she had a little more money, it would be certain for her to succeed.
もう少しお金があれば、彼女はきっと成功できるだろうに

・They were discussing the problem.
彼らは、その問題について話し合っているところだった
=The problem was being discussed (by them).
その問題は、(彼らによって)話し合われているところだった

・Nothing is more interesting than[as interesting as] skiing.
スキーよりおもしろいものは他にない
=Skiing is more interesting than[as interesting as] anything else.
スキーは、他のいかなるものよりもおもしろい
=Skiing is the most interesting of all (things).
スキーは、すべてのうちで最もおもしろいものだ

・I would not have told the truth, if I had known that.
それを知っていたら、本当のことは言わなかったのに
=Since I didn't know that, I told the truth.
それを知らなかったから、本当のことを言ってしまった

・In Japan, 20 percent of the people had some experience with volunteering.
=In Japan, one person out of five participated in a volunteer activity.
日本では、20%(つまり５分の１)の人たちがボランティア活動を経験していた
[に参加していた]

上例のような、本文ではパーセントで書かれていたものを、選択肢では分数(もしくはそれに準ずる表現)で書き換えているといったものもよく見かけられる。

・Never a moment goes by unless I think of her.

一時として彼女のことを思わないことはない

=I always think of her. いつも彼女のことを思っている

このように、その表現方法に惑わされることなく、内容的に本文と一致しているものを正確として選択できるかがこのタイプの設問のポイントになっている。

⑵ 受験生を引っかけさせようとする出題者のワナに引っかかるな。

こういった「内容一致(鵜)」型の問題でもうひとつ注意しておいてほしいのは、真偽は語句の類似ではなく、内容で判断するということ。いくら原文にある語句を用いてあっても、内容が異なっていれば(当たり前だが)×。

かえって本文中と同じ語(句)を散りばめている選択肢は引っかけ(つまり×)である可能性の方が高かったりする。

特に「数・量・程度を示す語」については、受験生は引っ掛かりやすいから注意。

(ex) most「大部分」と every, all「全て」
some「いくらか」と any「どんな～も」
few「ほとんど～ない」と a few「２、３の～」
little「ほとんど～ない」と a little「小量の～」
only a few「ほんの少しの～」と quite[not] a few「たくさんの～」
only a little「ほんのわずかの～」と quite[not] a little「たくさんの～」
a number of A「数多くのＡ」と the number of A「Ａの数」

こういった語句は、形から何となく意味も同じと錯覚しやすいもの。もちろんその内容は異なっている。以下もそのような例だが、両者が内容的には異なることが、瞬時に見切れるだろうか。

・They were almost dead.

彼らは死にかかっていた(ということはまだ死んではいない)

≠Most of them died. 彼らの大半は死んだ

almost については、「もう少し（のところ）で」と訳した方がいいことがある。

(ex) He was almost late. 彼はもう少しで遅刻するところだった
I almost won the race. 僕はもう少しでレースに勝つところだった
I almost drowned. すんでのところでおぼれるところだった

・Only a few expected that the film would have a long run.

その映画の長期上演を予想したのは、ほんのわずかの人たちだった
≠Quite a few expected that the film would have a long run.
多くの人々が、その映画の長期上演を予想した

⑶ 時制や単数・複数に注意せよ。

本文では現在の話なのに、選択肢では過去の話に内容がすり替えてあることもある。もちろんこんな選択肢も正解にはならないのは当たり前。このような時制や単数・複数のすり替えで受験生を引っ掛けさせようという”意地の悪い”選択肢も中にはあるから要注意。

⑷ 否定語を含まない否定表現に注意する。

① anything but ～「全く～ない」

(ex) The man was anything but a gentleman.
その男は全く紳士なんかではなかった

《もう一歩深く!!》

all, every, no, any(とその合成語), none などとセットで用いられる but は「～以外(に・で)、～を除いて」という意味になる。

(ex) Everybody but me was surprised.
私以外はみんな驚いた
They all slept but me.
私のほかは全員眠った
She did nothing but complain. ☞「彼女は不平を言う以外は何もしなかった」が直訳。
彼女は不平ばかり言っていた

そうすると The man was anything but a gentleman. は、直訳は「その男は紳士以外のいかなる者だった→紳士(だけ)ではいささかもではなかった→全く紳士なんかではなかった」となる。

② far from ～「全く～ない」

(ex) She is far from (being) satisfied with the result.
彼女はその結果には全く満足していない

③ know better than to do[原形]～「～するほどバカではない」

(ex) I know better than to tell the truth easily.

俺は簡単に本当のことを言うほど馬鹿じゃないよ

④ free from ～「～がない」

(ex) The plan is free from danger.

その計画には全く危険がない

《「far from A:全くAではない」と「free from A:Aがない」の見分け方》

far from A は「Aから遠い」という意味から転じて「Aからはほど遠い → 全くAではない」という否定の意味を表す。not～at all で書き換えられる。

far from の後には「名詞(の仲間)」以外に「形容詞」がこれる。

(ex) He is far from (being) happy. 彼は全く幸せではない

free from の後には「不安・心配・苦痛など」(つまり「嫌なもの、あって欲しくないもの」)を表す名詞が入る。

(ex) His composition is free from mistakes. 彼の作文にはミスがない

⑤ the last (person/thingなど) to do[原形]～/関係詞節～「決して～ない」

(ex) He is the last man to betray you.

彼は決して君を裏切りはしない

Tom was the last person (that) I expected to see there.

そこでトムに会うなんて全く予想外だった

⑥ fail to do[原形]～「1.～しない 2.～できない」

(ex) She failed to appear. 彼女は現われなかった

=She didn't appear.

I fail to see the reason. その理由が僕には分からない

=I cannot see[=understand] the reason.

⑦ beyond ～「～を超越している」　= above ～

(ex) What he did is beyond [=above] my understanding.

彼のしたことは、私の理解を超越している[越えている]

⇒彼のやったことは理解できない

= I cannot understand what he did.

She is above[=beyond] telling a lie.

彼女は嘘をつくような次元を超越している

⇒彼女は決して嘘をつくような人ではない

= She never tells a lie.

beyond[above]～の元々の意味は「～を超越している」。そこから「～の力が及ばない」、「(非難・賞賛など)を超越している」という意味が出てきた。more than S+V～で書き換えられる。

= What he did is more than I can understand.

⑧ remain to do[原形]～「いまだ～していない」　「～するためにまだ残っている」が直訳。

=be[have] yet do[原形]～

(ex) Most of the task is completed, but a few things remain to be done.

その仕事はほとんど完成したが、まだ少ししなければならないことがある

He is[has] yet to know the truth.

彼はまだ真実を知っていない

⑨ 修辞疑問文。

形は疑問文なのに、内容は疑問文ではないという英文がある。これを修辞疑問という。漢文でいうところの'反語表現'のことである。

(ex)「やつが負けるなんてことがあるだろうか(いやない)」

(ex) Who knows what will become of the world?

この世界がどうなるかなんて誰が知っていようか(いや誰も知らない)

⇒この世界がどうなるかなんて誰にもわからない

= Nobody knows what will become of the world.

Does it matter?

それは重要だろうか(いや重要ではない)

⇒ そんなことかまうもんか

= It doesn't matter.

What is the use of demanding an explanation from them?

彼らに説明を求めて何の役に立つだろうか（いや何の役にも立ちはしない）

⇒彼らに説明を求めても無駄だ

= It is no use[good] demanding an explanation from them.

How can I ever thank you?

どうしたらあなたに感謝の気持ちを表せるだろう（いやできない）

⇒お礼の申し上げようもありません

= I don't know how to thank you.

= I cannot thank you enough.

Who will believe such an absurd rumor?

誰がそんな馬鹿げた噂を信じるだろうか（いや誰も信じない）

⇒ 誰もそんな馬鹿げた噂など信じない

= Nobody will believe such an absurd rumor.

Can I ever forget her kindness?

彼女の親切を忘れることができようか（いやできない）

⇒ 私は彼女の親切を決して忘れることはできない

= I can[will] never forget her kindness.

ただし、その英文が普通の疑問文なのか、修辞疑問なのかを文脈・状況・イントネーションなどで判断しないといけない場合もあるので、その点は注意が必要（しかしこれは日本語でも同じ）。

(5) 真偽は本文の内容に即して判断すること。

選択肢がたとえ常識や自分の価値観から見ておかしかったとしても、本文の内容と一致していれば正解となる。

(6) まとめ – 真偽判定のルール。

最後に、何が正解で何が不正解になるかのルールをまとめておこう。

《正解の選択肢》

表現形態や常識、自分の価値観に関係なく、選択肢の内容が本文と一致しているもの。

《不正解の選択肢》

⑴ 内容が本文とは明らかに異なっていたり、関連性がない選択肢。

⑵ 関連性はあるが、本文の内容を越えて[逸脱して]しまっている選択肢。

⑶ 本文中では明らかな数・量・程度の記述が不明確だったり、異なっている選択肢（特に、数・量・程度を表す表現には注意せよ）。

⑷ 「最も」「唯一の」「必ず」「絶対」「決して～ない」などの語（要するに程度が著しい語）が使われている選択肢は、×であることが多い。これを「極論不一致の原則」という。
例外は、本文の内容自体が極論の場合。

(ex) absolutely「絶対に」　all/every「すべての～」　invariably「いつも」
only「唯一の～」　few/little「ほとんど～ない」　never「決して～ない」
without fail「間違いなく」　(almost) always「(ほとんど)いつも」　any「いかなる」
without exception「例外なく」　necessarily/certainly/definitely「必ず」